

# 世界で活躍する白い杖の留学生 IAVIが国際大会

国際視覚障害者援護協会（International Association For The Visually Impaired = IAVI、石渡博明理事長）は、2019年11月29、30日、東京・九段北のアルカディア市ヶ谷で、「白い杖の留学生国際大会～過去から未来へ～日本で学んだ元留学生たちとともに」を開催した。IAVIの支援を受けて留学した元留学生9か国12人を中心に、日本で活躍する元留学生、現役の留学生、支援者ら延べ100人以上が参加した。（本誌）

## 補助金の打ち切り

1971年、日本に留学していた4人の視覚障害者（台湾2人、韓国、香港）が、国際盲人クラブ（International Club of the Blind = ICB）を発足させたのが、国際視覚障害者援護協会の起源。初代理事長の<sup>キムチーフン</sup>金治憲さんは、視覚障害が理由で留学が叶わなかったものの、在日韓国人の支援を受けて来日。千葉県立盲学校で理療を学んだのち、和光大学を卒業した。

1976年に韓国からの自費留学生を支援したのがICBの援護事業の始まりで、81年にはICB奨学制度を創設、82年からはほぼ毎年、留学生を受け入れている。93年には留学生の滞在拠点が完成し、国際視覚障害者援護協会と改称。95年に社会福祉法人として認可され、現在までに80人以上の留学生を支援している。

だが、2017年まで続いていた文部科学省からの補助金が、「留学生受け入れ活動が国益にそぐわない」として打ち切られてしまい、現在、IAVIは深刻な資金難と戦っている。

## 効果抜群の研修

29日に行なわれたのは「来日留学生のためのマッサージ研修」で、講師は筑波技術大学教授の藤井亮輔さん。藤井さんは「みんな、それぞれの国で活躍していて嬉しい。IAVIの成果だと思う」と留学生が日本に滞在していたころを懐かしんだ。

鍼・灸・あん摩マッサージが発展し、社会的に評価されるために必要なものとして、藤井さんは「誰が行なっても同じ効果がある再現性」を挙げる。また、各国で理療を牽引するリーダーが欠かせないとし、視覚障害者の理療が日本で社会的に評価されている背景には、「教育の力」があるという。そして、日本の理療教育の歴史を展望し、当事者自身による権利擁護運動と、専門の理療科教員を養成する機関（現在の筑波大学理療科教員養成施設）の存在が大きいと述べた。現在、各国で理療の普及や指導に尽力している元留学生には、専門の教員を養成する施設の設立も目指してほしいと訴えた。

実技指導では、眼精疲労や五十肩などに効果があり、「明日からすぐ使える、効果抜群で再現性のある手技」を紹介した。

## 未来への集合写真

30日の大会の開会にあたって、IAVI理事の新井愛一郎さんは「8年ほど前から、元留学生に集まってもらい、交流会を開きたいと考えていた。今こそIAVIの活動の成果を多くの人に知ってもらい、オールジャパンの支援を受ける大切な時期」という。プログラムや記念品とともに配られた1枚の記念写真（次ページ）は、前日に撮影されたもので、元留学生と石渡さん、新井さん、藤井さんが写っている。その写真は「今までの活動をあ